

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

タルコット・パーソンズの日本社会学における受容過程の分析：従来のパーソンズ受容の認識に対する『社会学評論』調査による応答

著者	兼子 諭, 徳安 彰
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	58
号	4
ページ	143-162
発行年	2012-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/7346

タルコット・パーソンズの 日本社会学における受容過程の分析

—従来のパーソンズ受容の認識に対する『社会学評論』調査による応答—

兼 子 論
徳 安 彰

目次

1. 本稿の目的と分析の視点の提示
2. パーソンズ引用の数量的動向の考察
3. パーソンズ引用の時代的動向の考察
4. 本稿の結論 『社会学評論』にみる日本社会学におけるパーソンズの位置

表1 『社会学評論』においてパーソンズを引用した文献（1950-2009）

1. 本稿の目的と分析の視点の提示

本稿は、日本社会学におけるタルコット・パーソンズの社会学および社会理論の受容過程を、『社会学評論』（以下『評論』と略記）における彼の著書および論文の引用動向を素材としながら考察するものである¹。

日本でパーソンズ受容が始まったのは1950年代と早く、例えば東京大学では「パーソンズ研究会」が開催され、本研究会に参加していた富永は、日本におけるパーソンズ初の翻訳書である『経済と社会』を出版した。また東北大学では新明正道がゼミにおいて、当時刊行されたばかりの『社会システム』を取り上げ、パーソンズ研究に着手していた（なお、本ゼミに参加していた田野崎昭夫や佐藤勉などは、後に『社会システム』や『社会体系と行為理論の展開』などを翻訳するなど、日本におけるパーソンズ受容の主導的人物となっている）。また、1960年には京都大学のグループが『行為の一般理論を目指して』の部分訳を翻訳する（中野 1999: 117-118）。

しかしながら富永によれば、日本におけるパーソンズ受容においてはその正確な理解よりもイデオロギー性が先行しており、70年代に入ると、アメリカ社会学におけるグルードナーや現象学的社会学、シンボルの相互作用論によるパーソンズ批判をうけて発生したイデオロギー批判が支配的

¹ 本稿はすでに徳安(2006a; 2006b)が行った『ケルン社会学・社会心理学雑誌 *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*』（以下 *KZfSS* と略記）を素材としたドイツ社会学におけるパーソンズ受容についての学説史的研究を応用したものである。

となることで、1950-60年代に形成されたパーソンズ理論への関心は、1970-80年代後半には日本社会学からは完全に去ってしまった（富永 2002: 271-272）²。また、富永とは対照的に、厚東と高坂の主張によれば、1970年代においてパーソンズ社会学、特に構造－機能主義は日本社会学におけるメイン・パラダイムであり続けたが、80年代に入りパーソンズ社会学は、マルクスやヴェーバーとともに、フーコーや記号論にその理論的地位を明け渡した（厚東・高坂 1998: 29&33）³。

さて、このような富永らのパーソンズ受容の評価は、70年代については相違しながらも、80年代における、特にその構造－機能主義理論としてのパーソンズ理論は、そのメインパラダイムとしての地位を喪失したことを主張するという点で一致している。これに対して80年代後半に入り、高城和義や油井清光、進藤雄三を中心とする新しいパーソンズ研究の担い手の登場によって、その受容は新たな段階を迎えることになる。特に高城は一連の著作において、パーソンズの理論形成をその生活史的側面から考察し、第二次大戦後における人種問題に代表される統合問題に揺れるアメリカ社会の歩みの中にパーソンズを位置づけ、さらにその高等教育論の紹介と検討を行うことで時代の問題意識に即したパーソンズ像を描き出した（高城 1988; 1989; 1992）。また、これら3部作の集大成として公開された『パーソンズとアメリカ知識社会』（高城 1992）では、パーソンズの政治的・イデオロギー的スタンス、パーソンズ理論を生み出した宗教思想的背景、そして大学人として生きた彼の組織人としての実像を探るべく、彼の精神史をアメリカ社会に位置づけようと三著が再構成されている（なお、ここまでの高城の議論の総括に関しては松岡（松岡 2007）を参照した）。

ハーバード大学アーカイブズの未公開資料の検証に基づく高城の一連の著作は、かつてミルズによって批判された「誇大理論家」、あるいは彼自身による「重度の理論病患者」という蔑称によって示されるような一般理論家としてパーソンズには集約されない、社会理論家あるいはアメリカを中心とする近代社会論者としてのパーソンズの実像を描きだしている。さらに、高城に続いて油井や進藤は、医療や宗教、あるいはファシズムといった問題へのパーソンズの関心やその理論的可能性を紹介することで、日本におけるパーソンズ・ルネッサンスの端緒を開拓する役割を果たした（進藤 2006; 油井 2002）。そして、このような日本におけるパーソンズ受容の新たな展開は、日本とアメリカで開催されたパーソンズの生誕100年を記念したシンポジウムとその報告をもとにした

² ただし、このような富永のパーソンズ受容の評価について付言しておきたいのは、彼自身が2004年に著した『戦後日本の社会学』において、富永自身と高城和義、今田高俊、そして盛山和夫を連ねるかたちで、日本社会学におけるパーソンズ受容の継続性を主張していることである（富永 2004: 245-276）。本論ではとりわけ富永の『社会変動の理論』と今田の『自己組織性』の理論的課題の接続性に焦点が向けられており、日本社会学におけるパーソンズ受容の理論的位置づけについて議論が展開されているわけではないが、少なくとも日本社会学におけるパーソンズ受容の90年代までの継続性を主張しようとしている点は看過されてはならない。

³ このような状況を考慮して塩原は、70年代に機能主義とマルクス主義が有していたパラダイムとしての地位を両者が80年代に譲り渡して以降、日本の社会学にはどれが主役を演ずるわけでもないパラダイム多元主義が出現したと主張する（塩原 1998: 11）。

編集本の出版というかたちで結実した（富永・徳安 2004）。本著では戦後パーソンズ研究を主導した富永や佐藤、田野崎、また新睦人や矢澤修次郎はもちろんのこと、高城や油井といった80年代後半以降のパーソンズ研究の中心人物、加えて、盛山和夫や三上剛史、もう少し若い世代では佐藤成基や市野川容孝などといった、日本社会学において理論社会学研究や社会学史研究を牽引する論者が名を連ねている⁴。

以上のようにパーソンズ理論の発展と日本におけるその受容の小史を確認することから、本論を進める上でいくつか検討すべき課題が提起される。まず挙げられるのが、富永らが主張する、1980年代におけるパーソンズ理論のパラダイムとしての地位の喪失という論点である。本論では『評論』を対象に、このような認識がまず量的に妥当なものかどうかを検討し、その上で、この認識が妥当であるとすればその原因を、その受容動向から推察したい。次に挙げられるのがパーソンズ受容の分野についてである。先程のべた受容の小史から、日本社会学におけるパーソンズ受容に対しては、専らその構造 - 機能主義システム理論に焦点が向けられ（またそれが背景となりパーソンズ受容が衰退し）、パーソンズ理論の多領域におよぶ応用は、高城などが登場する80年代後半を待たなければならないという認識が浮上する。そこで本論では『評論』をもとに、日本におけるパーソンズ受容の布置を明示しながら、このような認識が妥当なものであるかを検証する。

以上の2点を課題としながら、本論は2節においてパーソンズ引用の全体的な数量的動向について、3節においては時代別の動向について、それぞれ検討を行う。

2. 『評論』におけるパーソンズ引用の数量的動向の特徴

まずここでは、『評論』におけるパーソンズ引用の数量的動向の全体像をまとめ、その特徴を明示する。1950年から2009年の60年間において、『評論』に掲載された論文（特集論文と一般投稿論文）をすべてリストアップしたのが表1である。パーソンズの著作を引用した論文は142点、引用されたパーソンズの著作は、共著も含めて述べ数は326点にのぼる。2009年までに掲載された特集論文と一般投稿論文の全数は1239本なので、全体の約11%は何らかの形でパーソンズの著作に言及していることになる。また、論文1本あたりの平均引用点数は約2.4本である。そして、5年ごとに引用論文数と引用された文献（著作・論文をいずれも一点）とする）の延べ数の動向をグラフにしたのが図1である。さらに、これを徳安による『ケルン社会学・社会心理学雑誌』（以下 *KZfSS* と略記）における引用動向（1950-2004）をグラフにした図2と比較すると、以下の点が明

⁴ さらに2年後には富永によって、パーソンズ・ルネッサンスに携わる研究者を中心としながら、さらに馬場康雄によるルーマン機能主義的社会理論の検討、田中秀隆によるブルデュー芸術社会学の検討、そして浜日出夫によるエスノメソドロロジーからの秩序問題モデルの提示などが所収された、理論横断的な論文集が編集され出版に至っている（富永 2004）。ここから我々は、日本社会学におけるパーソンズ研究を、理論研究全般のプラットフォームを提供するものとして評価することができるだろう。

図1 『社会学評論』におけるパーソンズの引用動向（1950-2009）

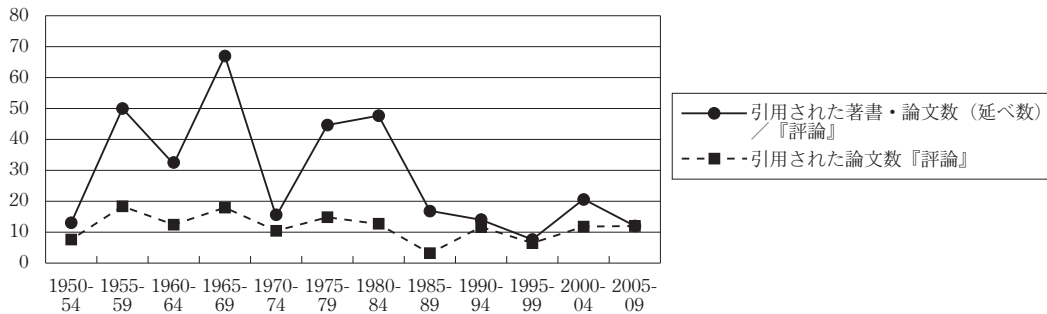
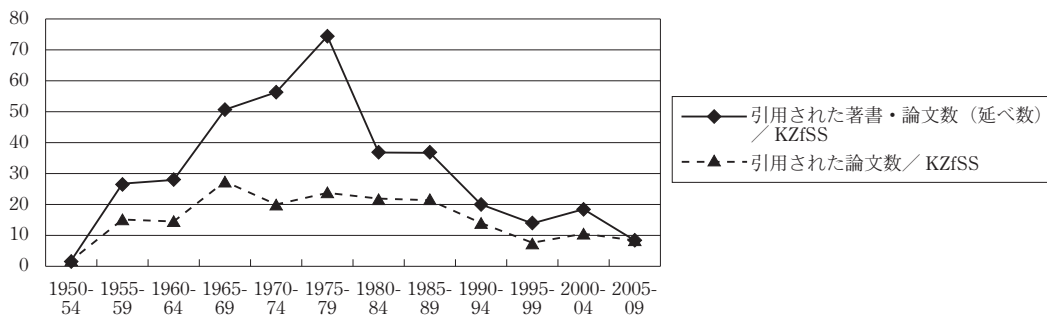


図2 『ケルン社会学・社会心理学雑誌』におけるパーソンズの引用動向（1950-2009）



らになる（徳安 2006: 41）⁵。

まず引用動向についてみると、両者共に1950年代後半から増加し、1985年後半に落ち込むものの、それ以外の時期においてはほぼ10点代を維持しながら今日に至ることが分かる。次に引用された著書および論文の延べ数をみてみると、引用論文数では同水準かむしろ劣るにもかかわらず、延べ数では、1950年代から60年代、そして1980-84年の5年間にかけて、KZfSSのそれを上回っている。このことは、特に日本におけるパーソンズ受容が上記の時期に集中的に展開されたこと、そして、翻ってみれば、80年代後半以降、急激にその受容密度が後退したことを示している。このことは、1本あたりの平均引用数の推移—1950年代前半が1.8本で後半が約2.8本、60年代前半が2.5本で後半が3.2本、70年代前半が1.4本で後半が3.0本、80年代前半が3.7本で後半が5.7本、90年代前半が1.2本で後半が1.1本、2000年代前半が1.8本で後半が1.0本—でも明らかである。なぜこのような趨勢を示すことになったのかは、次節での時代的傾向から推察したい。

次に、パーソンズの著作でどれが多く引用されたのかについてみてみよう。原著と翻訳をあわせて引用回数が10回を超えたものは、以下の通りである。

⁵ なお、徳安による調査は2004年までに刊行されたものを対象としているため、2005年から2009年に刊行されたものについては、兼子が改めて調査した。

- ① *Structure of Social Action* 49回
- ② *The Social System* 48回
- ③ *Toward a General Theory of Action* (with Edward A. Shils) 37回
- ④ *Family, Socialization and Interaction Process* 21回
- ⑤ *Working Papers in the Theory of Action* 20回
- ⑥ *Economy and Society* (with Neil J. Smelser) 17回
- ⑦ *Essays in Sociological Theory Pure and Applied* 16回
- ⑧ *Essays in Sociological Theory (rev. ed.)* 14回
- ⑨ *Action Theory and Human Condition* 10回

このようにみても、まずは KZfSS がドイツ社会学において示したのと同様、『評論』が示す日本社会学のパーソンズ受容においても、初期の *Structure of Social Action*、中期の *Essays in Sociological Theory*、*Toward a General Theory of Action*、そして *The Social System* が代表作として認知されていることが分かる。特に、*Structure of Social Action* を除く三作品の総計を考えれば、その受容がいかに、中期の構造—機能主義システム論に集中しているのかがわかる。

反対に、発表時期の遅さを考慮してもなおドイツとの比較で明らかになるのは、日本社会学においては、パーソンズがAGIL図式を提唱して以来展開された社会進化論（代表は *Societies*）や近代社会論（代表は *The System of Modern Societies*）が、それぞれ引用回数が6回と4回に留まるといったように、その重要性が必ずしも認知されてはいないという点である（KZfSS では2009年時点で *Societies* が12回、*The System of Modern Societies* が17回を数える）。ここから我々は、パーソンズに対する日本社会学における一般的評価—構造—機能主義システム理論であり、またその理論的欠点の明白と共に忘却された人物—が、まさに『評論』において典型的に示されていることが分かる。

3. パーソンズ引用の時代的動向の考察

前節での日本社会学におけるパーソンズ受容の全体的特性に関する議論をふまえて、本節では、さらにいくつかの時期区分を設けて、その動向を詳しく検討する。

(1) 1950年代—パーソンズ導入の始まり

『評論』におけるパーソンズ受容の歴史は古く、すでにその創刊年である1950年に小松堅太郎などによって言及がなされている⁶。その後も、田原音和や青井和夫、また作田啓一や小関藤一郎、

⁶ 河村望によれば、1950年は『社会学評論』の創刊とともに、その前年から発足した新制大学に社会学の講座がおかれるなど、戦後日本社会学が本格的な展開を見せる年であった。これ以降日本における社会学者の数が増加すると共に、パーソンズやマートンに代表されるアメリカ社会学理論の導入とあいまって、日本社会学も新たな展開を迎えることとなった（河村 1975: 324）。

鈴木広、そして、後に日本社会学におけるパーソンズ受容の主導的人物となる富永健一や田野崎昭夫などによって、パーソンズは広く言及されている。

それでは、この時代のパーソンズ受容の特徴として指摘できる点をいくつかあげてみよう。まず挙げられるのが、その理論研究における応用の広さとその重要性である。それは、①1956年の江藤論文や1957年の松野論文などのパーソンズ自身の理論研究、②社会システム理論や行為理論の定立を志向する1957年と58年の富永論文や機能主義的社会理論の定立を志向する1956年の鈴木論文に典型的な、理論的パラダイムの構築のための検討、③1950年の小松論文や1954年の作田論文のように、ヴェーバーやデュルケムの検討のための理論的手がかりを得るための援用、といったように、パーソンズの受容は理論論文を中心に多様な言及がなされており、しかも、①と②においてはそれぞれの論文において中心的な検討対象として位置づけられていることから明かである。また、1950年の山本論文や1953年の木原論文による山村研究、1955年の田原と田野崎の共著論文による漁村研究、1959年の鈴木論文による都市研究など、パーソンズは日本の地域社会や共同体研究においても援用されている。

(2) 1960-70年代—パーソンズ受容・接近の最盛期

さて、60年代に入り日本社会学におけるパーソンズ受容は、70年代前半において一時停滞するものの、とりわけその引用論文数において充実期を迎えることになる。

その受容の方向性としてまず挙げられるのは、パーソンズ社会システム理論自体に対する、より徹底的な理論的検討であり、ここでは特に、『社会体系論』における構造-機能分析によって暫定的に提唱された静学的志向に対する批判を、その後のAGIL図式への展開によって、パーソンズ自身がいかに応答し得ているのかが問題とされる。この文脈で特に重要な論者としては、小室直樹と佐藤勉の名が挙げられる。小室は1966年の論文（『構造機能分析と均衡分析』）において、パーソンズのAGIL図式が近代経済学を超える動学的な一般均衡分析の理論的基盤になり得るものとして積極的に評価しながら、みずからはさらにその数学的知見をもって、AGIL図式の理論的再構成を図っている。また、佐藤は1969年の論文（『機能主義における変動理論の方法論的基盤』）において、パーソンズの機能主義を「統合論的偏重」として捉える従来の理解を偏見であるとし、そこに「方法としての規範主義」の脈を見出しながら因果論的範疇を導入することによって、パーソンズ機能主義理論の変動理論としての構築の可能性を提起する⁷。

⁷ 『評論』の動向以外にパーソンズ社会システム理論の一般理論化が60-70年代の日本社会学における代表的な理論的課題であったことを端的に示すものとして、1974年に出版された『社会学講座』の第一巻である『理論社会学』を挙げることができる（青井 1974）。講座の巻頭を飾る本著は富永健一、吉田民人、小室直樹、直井優といった日本を代表する構造-機能主義論者に青井和夫や稲上毅を加えた執筆陣によって構成されており、著書全体の課題として、パーソンズを中心とする社会システム理論の検討が位置づけられている。

加えて、この問題と関連してこの時期にパーソンズ理論への接近のなかで強く意識されていたのは、パーソンズ行為理論が主体的人間の不在という論理を内包しているという批判とその精査という課題である。特にこの時期には、交換理論のホムズンの台頭に刺激を受け、とりわけ『行為の総合理論を目指して』と『社会体系論』に提示されたパーソンズの人間像、特に近代人のイメージ—社会システムによる制度化された役割の充当の内面化—への批判的検討が進展した。例えば1967年の山崎論文（『行為理論とそのパースナリティ理論に対する社会学的意義』）では、ホムズズによるパーソンズ批判を受けて、パーソンズ理論が一端はヴェーバーを媒介として人間の主体性を理論的導入しながら、のちにそのシステム理論の構築においていかに没主体的性格を保持するに至ったのかについて、詳細な検討がなされている⁸。

さて、ここまでみるとこの60年代から70年代にかけては、その理論的精査“のみが”展開されたかのように解釈されるかもしれない。しかしながら、表1をみれば分かるように、パーソンズ理論は、さまざまな研究分野による言及が認められる。まず理論研究としては、50年代にもみられたような、ヴェーバーやデュルケムなどの検討における理論的手掛かりとして参照された（佐藤嘉一、宮島喬、折原浩、中久郎、犬塚先、小倉充男など）。また理論研究以外にも、社会統制論（松本和良、下田直春など）、階級・階層論（下田直春、中野秀一郎など）、あるいは日本の村落地域構造・地域政治に関する議論（中田実、布施鉄治、古城利明など）や家族論（布施晶子、山村賢明、渡辺秀樹）など、パーソンズはさまざまな分野領域に応用されている。これらの研究者は当時それぞれの領域研究の主導的研究者であったり、その後それぞれの領域を牽引する研究者となる人物などである。また、分野を限定しなければ、見田宗介、塩原勉、大野道邦、片桐雅隆など、当代あるいはその後学会を主導する研究者を列挙することも可能である。これらの点を踏まえると、60年代から70年代におけるパーソンズ受容がいかに隆盛を極め、それぞれの研究者の教義的立場を横断して、日本社会学における基礎理論としての位置を確立していたのかが理解されるだろう。

(3) 1980年代—パーソンズ理論の受容・接近のありかたの転換期

80年代に突入し、パーソンズの受容や参照はまずその前半において、とりわけその引用延べ数で48本を数えることとなった（ちなみにこの本数は、60年代後半の67本、50年代後半の50本に続く、第三の本数を数える）。しかしながら、80年代後半に入り、その引用論文と引用された著書と論文の延べ数はともに激減する。

この原因を推察すれば、それは次の諸点を挙げることができる。まず、日本の社会学史のなかで

⁸ また、パーソンズ理論に対する包括的関心を志向する編著書としては、1975年に田野崎によって編集された『パーソンズの社会理論』を挙げることができる（田野崎 1975）。パーソンズ自身も論文執筆者として名を連ねる本著は、社会システム理論の考察の他にも、行為理論やパーソナリティ論、組織理論、そして文化システム理論など、特に中期までのパーソンズ理論を多角的に検討する構成となっている。

もある種の共通了解として挙げられるのが、1984年の橋爪・志田・恒松論文（「危機に立つ構造－機能理論」）のインパクトであろう。周知のように、本論はパーソンズだけではなく、日本社会学におけるパーソンズ受容の中心人物であった富永、吉田、そして小室の三者の構造－機能主義理論の問題を告発したものであり、くしくも後に志田自身が述べるように、1970年代まで「社会学における通常科学の途」をたどっていたはずの構造－機能理論は、80年代の中頃から急速に凋落し、1990年代には没落してしまった（志田 1997）。しかしながら直井が述べるように、ここで重要なのは、単に本論によって「構造－機能主義」の理論的問題が露呈したということではなく、橋爪らがそれ以降、構造－機能主義にとって代わるシステム論を提起しなかったことである（直井 2001）。このことは、構造－機能主義理論だけではなく、AGIL図式以降のパーソンズ理論の導入に対する社会学会全体の関心を後退させ、ひいてはパーソンズ自身を過去の人物へと押しやる原因となったのである⁹。

ただし、本論の調査を踏まえると、日本におけるパーソンズの参照や言及を後退させたのは、必ずしも上記のような消極的理由だけでは集約できない。それは、新たに台頭してきた現象学的社会学やエスノメソドロジー、あるいは、ハーバマスやルーマンといった80年代以降日本社会学においてその受容が進む理論家に関する論文において、パーソンズへの言及が、しかも論文における主要課題とされる点に典型的に表れている（前者でいえば浜日出夫、北澤裕、奥村隆など。後者でいえば、森元孝、馬場康雄など）。このことを踏まえれば、少なくとも80年代における日本社会学におけるパーソンズ理論の失墜という消極的評価は単純に過ぎるだろう。パーソンズ理論は教義横断的な理論的アリーナの入口を提供するものとして位置付けられるのであり、この時代のパーソンズ論文への言及への数的後退は、あくまでパーソンズ“自身の”理論研究の縮減という点に由来するものである。

（4）90年代以降－パーソンズ理論のメインパラダイムとしての陥落と新たな研究領域による導入

90年代に入り、パーソンズ理論の言及は、その引用論分数でみれば19本となり、80年代よりも多く、パーソンズ受容の最盛期である70年代に近づきつつある。また、80年代におきたパーソンズ受容の転換、すなわちエスノメソドロジーやルーマンシステム論などに関する論文における参照（椎野信雄、西原和久、保田卓、園田浩二など）が継続されるとともに、70年代まで盛んであったヴェーバーやデュルケムといったパーソンズ以前の古典的社会学に関する議論の理論の手がかりとしても言及されるといったように（宇都宮京子、梅沢靖など）、ひとまずパーソンズ理論への接近

⁹ この時期パーソンズの構造－機能主義理論に集中的に取り組んだ著書としては、中久郎編による『機能主義の社会理論』が挙げられる。本著では、中野秀一郎や新睦人といった論者らが、パーソンズ構造－機能主義論の批判的継承を企図した論文を執筆するほか、90年代にパーソンズ・ルネッサンスの一翼を担う進藤がパーソンズの行為理論とシステム理論について概説的論文を執筆している（中 1986）。

は継続されているものとして評価することができる。

しかしながらより重要なのは、90年代に突入し、パーソンズ理論を明示的に論文自体の主要な検討対象としていたのが、富永や新などといったパーソンズ受容の第一世代を除けば、90年代においては1990年の佐藤成基論文（「秩序問題と再生産論」）、2000年代に突入しても2000年の油井論文（「パーソンズにおける「社会的共同体」と公共性」）にすぎないという点である。パーソンズ・ルネッサンスの一翼を担う進藤の論文も2本ほど確認することができるが、あくまでそれらは、パーソンズの医療社会学の一テーゼ（病人役割）についての参照にとどまるものである。このことは、まさにパーソンズ社会学のメインパラダイムからの陥落を示すものである。同時にこのことは、80年代に橋爪らが提起したパーソンズ社会学の問題を純理論的に克服することの放棄を意味する。

ただし、90年代以降、一方でパラダイムとしての位置を喪失したパーソンズ理論は、他方ですれによって、それまでパーソンズ理論が必ずしも言及されなかった、あるいは言及されることの少なかった分野によって、参照されるようになったのも確かである。さらにそれらの引用論文をみると、例えば数土直紀（数理社会学）、中河伸俊（社会構築主義）、武川正吾（福祉社会学）、黒田浩一郎（医療社会学）などといった、90年代以降発展を遂げる応用社会学やそれを主導する研究者らによって、パーソンズは参照されている。特に医療社会学については、日本におけるパーソンズ・ルネッサンスの中心人物である高城や進藤らが熱心に取り組んだ領域であり¹⁰、80年代後半以降の日本社会学におけるパーソンズの“再”受容の成果を典型的に示している。

4. 本稿の結論 『社会学評論』にみる日本社会学におけるパーソンズの位置

さて、ここでは最後に、1節で示した従来の日本社会学におけるパーソンズ受容への認識に対する応答を試みることにしよう。まずは1980年代におけるパーソンズ理論のパラダイムとしての地位の喪失という論点であるが、『評論』の引用動向を見る限りでは、80年代はあくまで転換期にすぎず、パーソンズ理論のパラダイムとしての地位の喪失は、むしろ90年代に本格的なものになったと評価するのが妥当である。ただし、このことは富永が主張するようなパーソンズ理論への関心の喪失を意味するものではない。このことは、少なくとも引用論文数をみれば、2000年代に突入しても2000年代以前と同様に、5年後ごとの数値でほぼ10点代を維持していることから明らかである。

次に日本社会学におけるパーソンズ受容の多様性という論点であるが、確かに60年代から70年代にかけて、パーソンズ理論は一方で構造 - 機能主義システム理論を唱導するものとして評価されながら、他方でその動学的可能性をもって彼の理論的妥当性を精査するといった論文が数多く発表されたのは間違いない。しかしながらパーソンズは、すでに50年代からヴェーバーやデュルケ

¹⁰ パーソンズ医療社会学についての研究としては、これまで列記した文献のほかにも高城（高城2002）が挙げられる。

ムの理解のための理論の手がかりとして参照されたり、また日本の村落社会などの考察において言及されたのであり、その多様な受容は何も80年代に始まったことではない。『評論』を見る限りにおいて、パーソンズ理論は常にそれぞれの時代の社会学者に求められる課題に取り組む研究者に示唆を与え、また、幅広い理論的探求に対するプラットフォームとしての役割を果たしてきた。そして、この傾向は2000年に突入しても、基本的に変わることのないものである。

さて、本論ではあくまで『評論』のみを検討対象としたため、本論の結論が日本社会学全体におけるパーソンズ受容の特徴として捉えられるわけではない。よって、関東社会学会が発行する『年報社会学論集』など、他の主要学会誌における引用動向の調査によって、学会全体のパーソンズ受容の特性を、さらに明らかにしていかなければならないだろう。また、パーソンズ理論の有するその広範囲な応用可能性を考慮すれば、社会学関連だけではなく、教育学、経済学、政治学、あるいは、家族研究や医療研究に関連する雑誌などでの参照が推定される。ここから、日本社会学だけではなく、日本の社会科学におけるパーソンズ受容の動向調査も課題となる。また、国際比較という点では、当然のようにパーソンズ自身が活躍した「アメリカ社会学評論 *American Sociological Review*」や「アメリカ社会学雑誌 *American Journal of Sociology*」との比較によって、パーソンズ社会学の継承動向に関するより精密な議論を展開することができるだろう。

おそらくパーソンズ理論は70年代までのようなパラダイムの位置を回復することはないが、しかしながらそれぞれの時代の求める社会学的研究において常に参照され続けるのではないだろうか。そして、もしパーソンズ再興のより本質的な問題を挙げるとすれば、単にパーソンズが現在の研究によって参照可能かを問うだけではなく、その応用のなかで、まさに80年代以降取り残された理論的課題が解決がなされるのかどうかにあるといえる。

参考文献

- 青井和夫編, 1974, 『社会学講座 1 理論社会学』東京大学出版会.
- 河村望, 1975, 『日本社会学史研究・下』人間の科学社.
- 厚東洋輔, 1998, 「日本の社会学の戦後50年」高坂健次・厚東洋輔編『講座社会学 1 理論と方法』東京大学出版会.
- 松岡雅裕, 2007, 「テーマ別研究動向 (パーソンズ)」『社会学評論』58 (2), pp. 231-242.
- 中久郎, 1986, 『機能主義の社会学理論 パーソンズ理論とその展開』世界思想社.
- 中野秀一郎, 1999, 『タルコット・パーソンズ—最後の近代主義者—』東信堂.
- 直井優, 2001, 「構造—機能理論の危機そして没落からの克服」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』27, pp. 189-203.
- 塩原勉, 1998, 「日本の社会と社会学」高坂健次・厚東洋輔編『講座社会学 1 理論と方法』東京大学出版会.
- 志田基与師, 1997, 「社会学におけるシステム理論のジレンマ—日本における構造—機能分析の発展と没落」, 井上俊・上野千鶴子・大沢真幸・見田宗介・吉見俊哉編, 岩波講座現代社会学 別巻『現代社会学の理論と方法』岩波書店, pp. 21-38.
- 進藤雄三, 2006, 『近代性論再考 パーソンズ理論の射程』世界思想社.
- 徳安彰, 2006a, 「ドイツ社会学におけるタルコット・パーソンズの受容過程の分析—『ケルン社会学・社会心理学雑誌』における引用動向を中心に—」東北社会学研究会編『社会学研究』79, pp. 35-63.
- , 2006b, 「『ケルン社会学・社会心理学雑誌』におけるタルコット・パーソンズの引用動向調査」法政大学社会学部編『社会志林』53 (1), pp. 35-53.
- 高城和義, 1986, 『パーソンズの理論体系』日本評論社.
- , 1988, 『現代アメリカ社会とパーソンズ』日本評論社.
- , 1989, 『アメリカの大学とパーソンズ』日本評論社.
- , 1992, 『パーソンズとアメリカ知識社会』岩波書店.
- , 2002, 『パーソンズ 医療社会学の構想』岩波書店.
- 田野崎昭夫編, 1975, 『パーソンズの社会学理論』誠信書房.
- 富永健一, 2002, 「訳者解説 パーソンズの社会学理論」富永健一・高城和義他訳『人間の条件パラダイム 行為理論と人間の条件第四部』勁草書房.
- , 2004, 『戦後日本の社会学 一つの同時代学史』東京大学出版会.
- 富永健一編, 2006, 『理論社会学の現在 客観主義から主観主義まで』新曜社.
- 富永健一・徳安彰編, 2004, 『パーソンズ・ルネッサンスへの招待 タルコット・パーソンズ生誕百周年を記念して』勁草書房.
- 油井清光, 2002, 『パーソンズと社会学理論の現在 T.Pと呼ばれた知の領域について』世界思想社.

表1 『社会学評論』においてパーソンズを引用した論文（1950-2009）

[発行年・号・著者・論文タイトル, および, [引用されたパーソンズの著書・論文のタイトル]

著書・編著名の略号は以下の通り。なお、これらの略号については高城（高城 1986）を参照した。

SSA *Structure of Social Action*, 1937. (稲上毅・厚東洋輔・溝部明男（5巻のみ）訳『社会的行為の構造』（1-5）, 1976-89.）

EST 1 *Essays in Sociological Theory: Pure and Applied*, 1949

TGTA *Toward General Theory of Action*, editor and contributor with Edward A. Shils and Edward C. Tolman, Gordon W. Allport, Clyde Kluckhohn, Henry A. Murray, Robert R. Sears, Richard C. Sheldon, Samuel A. Stouffer, 1951. (部分訳, 永井道雄・作田啓一・橋本真訳『行為の総合理論を目指して』, 1960.）

SS *The Social System*, 1951. (佐藤勉訳『社会体系論』, 1974.）

WP *Working Papers in the Theory of Action*, in Collaboration with Robert F. Bales and Edward A. Shils, 1953.

EST 2 *Essays in Sociological Theory (rev. ed.)* 1954.

F *Family, Socialization and Interaction Process*, co-authored with Robert F. Bales, James Olds, Morris Zelditch, and Philip E. Slater, 1955. (橋爪貞雄訳他訳『核家族と子供の社会化』（上）・（下）, 1970-71.）

ES *Economy and Society*, co-authored with Neil J. Smelser, 1956. (富永健一訳『経済と社会』 I・II, 1958-59.）

SPMS *Structure and Process in Modern Societies*, 1960

TS *Theories of Society: Foundations of Modern Sociological Theory*, co-edited with Edward A. Shils, Kasper D. Naegle, and Jesse R. Pitts, 1961. (部分訳, 倉田和四生訳『社会システム概論』, 1978.）

SSP *Social Structure and Personality*, 1964. (武田良三監訳『社会構造とパーソナリティ』, 1973.）

S *Societies: Evolutionary and Comparative Perspectives*, 1966. (矢澤修次郎訳『社会類型—進化と比較』, 1971.）

STMS *Sociological Theory and Modern Society*, 1967.

PSS *Politics and Social Structure*, 1969. (新明正道監訳『政治と社会構造』（上）・（下）, 1973.）

SMS *The System of Modern Societies*, 1971. (井門富士夫訳『近代社会の体系』, 1977.）

AU *The American University*, co-authored with Gerald M. Platt and in collaboration with Neil J. Smelser, 1973.

SSEAT *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, 1977. (田野崎昭夫監訳『社会体系と行為理論の展開』, 1992.）

E *The Evolution of Societies*, 1977.

ATHC *Action Theory and the Human Condition*, 1978. (部分訳, 富永健一・高城和義・油井清光他訳『宗

教の社会学』『人間の条件パラダイム』, 2002.)

1950-1954 (8)

- 1950 (1-3) 小松堅太郎「社会的存在と宗教形態」[SSA]
1950 (1-3) 山本登「通婚関係よりみた山村共同体の封鎖性と平等性」[EST1]
1950 (1-4) 小松堅太郎「社会的存在と宗教形態(つづき)」[SSA]
1953 (3-3) 執行嵐「夫婦生活の幸福度の予測と測定」[TGTA]
1953 (3-4) 木原健太郎「山村聚落内の階層意識に関する若干の考察」[EST1]
1954 (4-4) 作田啓一「アノミーの概念」[SSA/EST1/TGTA/SS]
1954 (4-4) 矢崎武夫「都市研究方法の発展」

“The Role of Theory in Social Research” in: *American Sociological Review*, 3

- 1954 (5-1) 家坂和之「社会制度の本質」[SSA/EST]

1955-1959 (18)

- 1955 (5-2) 斎藤吉雄「漁村の部落構造分析への一試論」[TGTA]
1955 (5-3) 森博「社会体系の概念について」[EST/TGTA/SS]
1955 (5-4) 田原音和・田野崎昭夫「漁村の階層構成」[EST]
1955 (6-1) 青井和夫「社会学と実験(その1)」[TGTA/WP]
1955 (6-1) 小関藤一郎「デュルケムにおける「社会的なもの」」[SSA]
1956 (6-4) 江藤則義「パーソンズの体系理論の一般的な性質と機能並びに構造・機能方法について」[SSA/EST1/TGTA/SS/WP/EST2/F]
1956 (6-4) 領家稷「社会学方法論の反省」[SS]
1956 (6-4) 鈴木広「機能的社會理論の展開」[EST1/TGTA/SS/WP/EST2/F]
1957 (7-2) 富永健一「社会体系-その概念・モデル・測定」[SSA/EST1/TGTA/SS/WP/F]

その他論文

“Some Comments on the State of the General Theory of Action” in: *American Sociological Review*, 18 (6) (1953)

- 1957 (7-2) 松野達雄「パーソンズ理論の次元=位相論的理解の試み」[SSA/TGTA/SS/WP]
1957 (7-2) 森好夫「パースナルとインパースナル」[TGTA/SS]
1957 (7-3&4) 加藤正泰「フランス社会学の伝統とその再認識」[SSA]
1957 (8-1) 佐々木交賢「集合意識の視界相互的考察」[SSA/SS]
1957 (8-1) 林三郎「記憶の社会性」[SSA]
1958 (8-3) 富永健一「意思決定の社会学理論」[TGTA/SS/F/ES]
1958 (9-2) 野口隆「社会構造と社会類型」[TGTA/SS]

¹¹ なお、本論においては、ESTが参照文献として挙げられているものの、それがEST1とEST2のどちらに関する言及かを特定することができなかった。よって、2節の数量調査では両方に加算した。

1959 (9-3) 鈴木広「都市研究における中範囲理論の試み」[EST]¹¹

1959 (9-4) 山根常男「社会学と精神分析」[SSA / TGTA / WP]

その他論文

“Psychoanalysis and Social Science” in: F. Alexander and H. Ross (eds.), *Twenty Years of Psychoanalysis* (1953)

1960-1964 (13)

1960 (10-2) 島田幸三郎「プロテスタント牧師の社会的役割と役割の相克」[TGTA]

1960 (10-2) 富永健一「都市家族の主婦における階層内同質性と階層間差異性」[EST]

1960 (10-2) 野崎治男「成層の普遍的必然性に関する機能理論の抽象性」[EST]

1960 (11-2) 松本和良「社会統制における人間的作因」

“Distribution of Power in American Society” (1957) in: *SPMS*

1960 (11-2) 高橋純平「社会統制論序説」[SS]

1960 (11-2) 中田実「農業兼業化の社会的構造」[F]

1962 (12-3&4) 佐藤勉「機能的構造的分析の基礎問題」[SS / WP / F / ES / SPMS / TS]

その他論文

“The Point of View of Author” in: M. Black (ed), *The Social Theories of Talcott Parsons* (1961)

1962 (12-3&4) 下田直春「パースンズにおける社会体系論の論理とその批判」[SSA / TGTA / SS / WP / EST2]

1962 (13-2) 布施鉄治「村落社会構造分析方法についての若干の考察」[F]

1962 (13-2) 見田宗介「価値意識の構造と機能」[TGTA / SS]

1962 (13-2) 山田敬道「社会統制の概念」[EST1 / TGTA / SS / WP / EST2]

1964 (14-4) 下田直春「社会成層論の経験的分析図式としての諸問題」[EST]

1964 (15-1) 新睦人「対立過程論序説」[EST1 / TGTA / SS / WP]

その他論文

“Some Problems Confronting Sociology as a Profession” in: *American Sociological Review*, 24 (1959)

1965-1969 (18)

1965 (15-2) 佐藤嘉一「ウェーバーの「理想型」とその現代的系譜」[EST / TGTA]

1965 (15-4) 中久雄「社会学における自殺理論の検討」[SSA]

1966 (16-3) 浜口恵俊「「状況的」行為の原理」[TGTA]

1966 (16-4) 小室直樹「構造機能分析と均衡分析」[SSA / EST1 / TGTA / SS / WP / EST2 / F / ES / SPMS / TS / STMS / PSS]

その他論文

“The Role of Theory in Social Research” in: *American Sociological Review*, 3 (1938)

“Some Comments on the State of the General Theory of Action” in: *American Sociological Review*, 18 (6)

(1953)

“A Sociological Approach to the Theory of Organization” in: *Administrative Science Quarterly* (1955)

“Malinowski and the Theory of Social Systems” in: R. Firth (ed.), *Man and Culture* (1957)

“Man in His Social Environment” in: *Centennial Review of Arts and Science* (1957)

“Some Ingredients of a General Theory of Formal Organization” in: A. W. Halpin (ed.), *Administrative Theory in Education* (1958)

“General Theory in Sociology” in R. K. Merton et al (eds.), *Sociology Today* (1959)

“Some Highlights of the General Theory of Action” in: R. Young (ed.), *Approaches to the Study of Politics* (1958).

“‘Voting’ and the Equilibrium of the American Political System” (1959) in: *PSS*

“An Approach to Psychological Theory in Term of the Theory of Action” in: S. Koch (ed.), *Psychology*, 3 (1959)

“Durkheim’s Contribution to the Theory of Integration of Social Systems” W. A. Kurt (ed.), *Emile Durkheim, 1858-1917: A Collection of Essays, with Translation and a Bibliography* (1959)

“The Point of View of Author” in: M. Black (ed), *The Social Theories of Talcott Parsons* (1961)

“On the Concept of Influence” (1963) in: *PSS*

その他共著論文

T. Parsons and A. L. Kroeber, “The Concept of Culture and Social System” in: *American Sociological Review*, 23 (1958)

1966 (16-4) 宮島喬「フランス社会学と心理学における人間の問題」[SSA]

1966 (17-1) 中野秀一郎「階級構造の要因分析に関する一考察」[SS/ES]

1966 (17-1) 山村賢明「『知名人』にみる日本の母のコンセプション」[TGTA]

1967 (17-3) 古城利明「多元主義的権力構造と地方政治」[PSS]

1967 (17-3) 本橋康子「組織分析の視角」[EST1/SS/SPMS]

その他編集本

A. M. Henderson and T. Parsons (eds.), *Max Weber: The Theory of Social and Economic Organization* (1947)

1967 (17-4) 布施晶子「都市家族の内部構造の変容に関する一考察」[EST1/F]

その他論文

“The Social Structure of Family” in: R. N. Anshen (ed.), *The Family: it Function and Destiny* (1954)

“The Stability of American Family System” in: N.W. Bell and E. F. Vogel (eds.), *A Modern Introduction to the Family* (1960)

1967 (17-4) 山崎達彦「行為理論とそのパースナリティ理論に対する社会学的意義」[SSA / TGTA / SS / WP/EST2]

その他論文

“The Place of Ultimate Value in Sociological Theory” in: *The International Journal of Ethics*, 45 (1935)

“An Approach to Psychological Theory in Term of the Theory of Action” in: S. Koch (ed.), *Psychology*, 3 (1959)

“The Point of View of Author” in: M. Black (ed), *The Social Theories of Talcott Parsons* (1961)

1967 (18-1) 山根常男・野々山久也「日本における核家族の孤立化と親族組織」[EST2/F/ES]

その他論文

“The Social Structure of Family” in: R. N. Anshen (ed.), *The Family: it Function and Destiny* (1954)

“The Elastic Links” in: *The Voice of America: Forum Lectures: The Family* (1964)

1968 (19-1) 富永健一ほか「消費行動の社会学的分析」[ES]

1969 (19-3) 中垣昌美「米国における日系人家族の世代的変容について」[F]

1969 (19-4) 折原浩「デュルケーム社会学の「保守主義」的性格」[SSA]

1969 (19-4) 山村賢明「集団の情動的側面と母子関係」[TGTA/F]

1969 (20-1) 清野正義「機能主義と社会変動」[SS]

1969 (20-1) 佐藤勉「機能主義における変動理論の方法論的基盤」[TGTA/SS/STMS]

その他論文

“The Point of View of Author” in: M. Black (ed.), *The Social Theories of Talcott Parsons* (1961)

“Cause and Effect in Sociology” in: D. Lerner (ed.), *Cause and Effect* (1965)

1969 (20-1) 中久郎「社会連帯論と社会主義」[SSA]

1970-1974 (11)

1970 (21-2) 本村汎「夫婦関係と幼児の社会化」[F]

1971 (22-1) 大野道邦「シンボルと社会」[SSA/TGTA]

1971 (22-1) 中野秀一郎「社会科学的概念としての「情報」について」[SS]

1972 (23-2) 富永健一「高田保馬の勢力理論」[ES]

1972 (23-2) 向井利昌「高田社会学における勢力理論」[SPMS]

1973 (23-4) 久慈利武「ホマンズ社会学理論の準拠枠」

“Some Problems of General Theory in Sociology” in: J. C. McKinney and E. A. Tiryakian (eds.), *Theoretical Sociology, Perspectives and Developments* (1970)

“Levels of Organization and The Mediation of Social Interaction” in: H. Turk and R. L. Simpson (eds.), *Institutions and Social Exchange* (1971)

1974 (24-4) 犬塚先「交換理論」—その系譜と性格」[ES]

1974 (25-1) 小倉充夫「資本主義の精神」論と社会主義の精神」[SSA]

1974 (25-2) 野尻依子「現代家族の社会的ネットワークパス解析の応用」[F]

1974 (25-2) 光吉利之「現代産業社会と親族関係」[SS]

“The Social Structure of Family” in: R. N. Anshen (ed.), *The Family: it Function and Destiny* (1954)

“The Normal American Family” in: F. M. Farber, P. Mustacchi, and R. H. L. Wilson (eds.), *Man and Civilization: The Family's Search for Survival* (1965)

1974 (25-3) 宮島喬「デュルケム理論における個人主義の位置とその意義」[SSA]

1975-1979 (15)

1975 (25-4) 塩原勉「理論社会学における若干の基本問題」[SS/S]

1975 (26-1) 小林淳一「社会秩序の社会学理論」[EST1/TGTA/SS/F/ES/SPMS/TS]

1975 (26-1) 渡辺秀樹「家族における社会化過程について」[F/SS]

1976 (26-3) 片桐雅隆「研究者の「下部構造」と組織理論」[SSA]

1977 (27-3) 加藤定夫「社会学的機能主義における因果分析の問題について」

“Cause and Effect in Sociology” in: D. Lerner (ed.), *Cause and Effect* (1965)

1977 (27-3) 柴野昌山「社会化論の再検討」[SSA/TGTA/WP/F/SSP]

1977 (27-3) 波平勇夫「経営組織の官僚制化とその経営者補充に及ぼす影響」[WP/SPMS]

1977 (28-1) 小倉充夫「第三世界と現代社会学」[S/SMS]

1977 (28-1) 笹谷晴美・小田利勝「「病人役割」の生活構造」[SSP]

1978 (29-1) 内藤考至「階層構造における人員配分原理としての競争」[TGTA]

1978 (29-2) 佐藤勉「社会的なものの論理」[SSA/SS/STMS/SSEAT]

その他論文

“Capitalism” in Recent German Literature: Sombart and Weber (concluded), II. *Journal of Political Economy*, 37 (1929)

“The Point of View of Author” in: M. Black (ed), *The Social Theories of Talcott Parsons* (1961)

“Durkheim on Religion Revisited, Another Look at the Elementary of the Religious Life” in: C. Y. Glock and P. H. Hammond (eds.), *Beyond the Classic? Essays in the Scientific Study of Religion* (1973)

“Law as intellectual Stepchild” in: *Sociological Inquiry*, 47(3-4) (1978)

1979 (29-3) 羽江忠彦「看護労働に関する一考察」

“Profession” in: *The International Encyclopedia of the Social Science*, 12 (1968)

1979 (29-4) 伴恒信「教育社会学との関連におけるサイコヒストリーの方法論的特質」[SSP]

1979 (30-2) 溝部明男「パーソンズのAGIL図式」[SSA/TGTA/SS/WP/F/STMS]

その他論文

“Some Comments on the state of the General Theory of Action” in: *American Sociological Review*, 18 (6) (1953)

“General Theory in Sociology” in: *Sociology Today* (1958)

1979 (30-3) 犬塚先「支配関係の分析枠組」[SS/PSS]

1980-1984 (13)

1982 (33-1) 浜日出夫「ピグマリオンとメデューサ」[SSA]

1983 (33-4) 門口充徳「交換関係と交換理論」

“Levels of Organization and The Mediation of Social Interaction” in: H. Turk and R. L. Simpson (eds.),

Institutions and Social Exchange (1971)

1983 (34-3) 川崎賢一「情報環境と現代青年文化」[F]

1983 (34-3) 栗原孝「役割能力論の考察」[SSA / TGTA / SS / WP / F / SSP]

1983 (34-3) 長谷川公一「ダイアド関係と紛争過程」[PSS]

1984 (35-1) 橋爪ほか「危機に立つ構造 - 機能理論」[SS / EST2 / ES / SSP]

1984 (35-1) 北澤裕「パーソンズ理論とエスノメソドロジー」[SSA / EST1 / WP / STMS / SSEAT / ATHC]

その他論文

“The Point of View of Author” in: M. Black (ed), *The Social Theories of Talcott Parsons* (1961)

1984 (35-1) 直井優「構造 - 機能主義による説明とテスト可能性」[STMS / TGTA]

1984 (35-1) 田野崎昭夫「後期パーソンズの理論について」[SSA / SS / EST2 / ES / S / STMS / SMS / SSEAT / E / ATHC]

その他論文

“General Theory in Sociology” in R. K. Merton et al (eds.), *Sociology Today* (1959)

“Some Considerations on the Theory of Social Change” in *Rural Sociology*, 23 (3) (1961)

“Recent Trends in Structural-Functional Theory” in: E.W. Count and G. T. Bowles (eds.), *Fact and Theory in Social Science* (1964)

“Some Problems of General Theory in Sociology” in: J. C. McKinney and E. A. Tiryakian (eds.), *Theoretical Sociology, Perspectives and Developments* (1970)

その他共著本

V. Lidz and T. Parsons (eds.), *Readings on Premodern Societies* (1972)

1984 (35-2) 飯田剛史「デュルケームの儀礼論における集合力と象徴」[SSA / ATHC]

その他論文

“Action, Symbols and Cybernetic Control” in: I. Rossi (ed.), *Structural Sociology* (1982)

1984 (35-2) 鹿又伸夫「地位達成分析の成果と課題」[EST1]

1984 (35-3) 森元孝「批判としての社会的行為論」[SSA / TGTA / ES / AU / ATHC]

1984 (35-3) 田中滋「「他者」の論理構造」[SS]

1985-1989 (3)

1985 (36-2) 倉田和四生「行為理論の展開」[SSA / TGTA / SS / WP / ES / TS]

その他 倉田和四生編訳『社会システムの構造と変化』(1984)

1988 (39-1) 馬場康雄「ルーマンの変貌」[STMS]

1988 (39-2) 田中耕一「秩序問題再考」[SSA / TGTA / SS / WP / TS / S / SSEAT / ATHC]

その他論文

“The Place of Ultimate Value in Sociological Theory” in: *The International Journal of Ethics*, 45 (1935)

1990-1994 (12)

- 1990 (41-3) 北嶋守「西洋科学技術導入期における蘭学者の伝統的制度への回帰」[SS]
 1990 (41-3) 佐藤成基「秩序問題と再生産論」[SSA/SS]
 1991 (42-1) 小林久高「社会規範の意味について」[SSA]
 1991 (42-1) 佐藤郁哉「主体と構造」[TS]
 1991 (42-3) 宇都宮京子「ウェーバーにおける現象学の意義とその影響について」[SSA]
 1992 (42-4) 藤沢三佳「スティグマとアイデンティティに関する一考察」[SSP]
 1993 (44-2) 場知賀礼文「価値志向と現代社会」[TGTA/SS]
 1993 (44-3) 山本泰「マイノリティと社会の再生産」[WP]
 1994 (45-1) 数土直紀「制度を支える自由」[TGTA]
 1994 (45-1) 梅沢精「デュルケムにおける二つの社会変動論」[SSA]
 1994 (45-2) 椎野信雄「エスノメソドロジー研究の方針と方向について」[SSA]
 1994 (45-3) 藤田哲司「権威的指示の受容原理」[PSS]

1995-1999 (7)

- 1996 (47-1) 西原和久「戦後思想と社会学理論」[ES]
 1996 (47-2) 鹿又伸夫「“予言の自己成就”と合理性」[SSA]
 1996 (47-3) 大和礼子「中高年男性におけるサポート・ネットワークと「結びつき志向」役割との関係」[F]
 1997 (48-1) 圓田浩二「メディアとしての美」[ATHC]
 1998 (49-3) 進藤雄三「福祉国家と医療の現代的位相」[SS]
 1999 (50-3) 森重雄「〈人間〉の環境設定」[SS/ES]
 1999 (50-3) 保田卓「ルーマンの高等教育論」[AU]

2000-2004 (12)

- 2000 (50-4) 油井清光「パーソンズにおける「社会的共同体」と公共性」[S/SMS/SSEAT/E]
 その他論文など

“Communism and the West: The Sociology of the Conflict” in: A. Etzioni and E. Etzioni (eds.), *Social Change: Sources, Patterns, and Consequences* (1964)

American Societal Community, unpublished in Parsons Papers, Harvard Archives (1979)

“Action, Symbols, and Cybernetic Control” in: I. Rossi (ed.), *Structural Sociology* (1982)

“A Tentative Outline of American Values” in: R. Robertson and B. S. Turner (eds.), *Talcott Parsons: Theorist of Modernity* (1991) (進藤雄三訳「アメリカの価値についての試論」中久郎・清野正義・進藤雄三訳『近代性の理論—パーソンズの射程』(1995))

- 2000 (51-1) 松浦雄介「知と信の社会理論」[SSA]
 2000 (51-3) 黒木茂浩「新たなカリスマ論をめざして」[SSA]
 2000 (51-4) 今井信雄「死と近代と記念行為」[ATHC]
 2001 (52-1) 圓田浩二「カタルシスと知的創造のインタビュー」[SS]

- 2003 (53-4) 山口一男「米国より見た社会調査の困難」[PSS]
 2003 (54-1) 巻口勇一郎「復原法を通じた道徳的秩序の再構築」[SSA]
 2003 (54-1) 中尾香「甘える男性像」[SS]
 2004 (54-4) 進藤雄三「医療と「個人化」」[SSA/SS/ATHC]
 2004 (54-4) 武川正吾「福祉国家と個人化」[ES]
 2004 (55-2) 松井克浩「ゲマインシャフトの重層性と『諒解』」[SSA]
 2004 (55-3) 中河伸俊「構築主義とエンピリカル・リサーチャビリティ」[SSA]

2005-2009 (12)

- 2005 (55-4) 野村佳絵子・黒田浩一郎「戦後日本の健康至上主義」[ATHC]
 2005 (56-1) 武藤正義「相互行為における倫理規範の性能分析」[SSA]
 2005 (56-3) 長谷川公一「社会学者はどのようにテキストを制作してきたか」[SMS]
 2006 (56-4) 額賀淑郎「医療化論と生物医療化論」[SS]
 2006 (57-1) 橋爪大三郎「言語派社会学の理論構成」[SS]
 2006 (57-1) 油井清光「比較近代化論とグローカル論」[S]
 2006 (57-3) 前田拓也「介助者のリアリティへ」[SS]
 2007 (58-4) 片瀬一男「情報化社会における市民的教養教育としての社会調査教育」[ATHC]
 2007 (58-4) 貞包英之「私的な死、恣意的な死」[SSA]
 2008 (59-1) 新睦人「現代社会論の現在」[SMS]
 2008 (59-1) 富永健一「産業主義の思想と戦後日本の社会」[ES]
 2009 (60-2) 高橋章子「相互行為論のデュルケム」[SSA]

(注記)

- 1 このリストは、1950年から2009年までの『社会学評論』に掲載された特集論文および一般投稿論文（特集の端書、講演、討論、講座、小論文、資料、研究ノート、書評論文、学会動向報告、分野動向調査論文、ルポルタージュ、時論などは今回割愛した）で引用された、パーソンズの著書および論文を網羅したものである。また、文中などでパーソンズの名前や文献などの記述される場合にも、それが脚注あるいは参考文献として明示されていない論文は割愛した。
- 2 当初論文で発表され後に編著に編入されたものについては、論文名と編著本を記載した。また、著者自身が学術誌などからの引用を行っている文献のうち、論文執筆時点で編書に所収されていることが確認された論文については、編著名のみを記載した。
- 3 リストアップには万全を期したが、特に1990年代前半までの論文は、文献指示が文献リストではなく脚注のなかで行われている場合が少なくないため、本論の課題である引用動向の把握には大きく影響を与えるとは考えにくいものの、若干の見落としの可能性が残っている。